

高知県香美郡

下分遠崎遺跡(Ⅱ)

(香我美町教育委員会埋蔵文化財報告書第6集)

1993-3

香我美町教育委員会

序

下分遠崎地区は、西方に大きく開いた山南盆地の出口に位置し、香宗川沖積層の肥沃な土地は古くから農耕地として、又、交通の要衝として重要視され中世には大忍庄屈指の豪族中氏の領地として栄えたと伝えられており、中氏と共に地域の豪族とし覇をとなえた香宗我部氏、長宗我部氏との葛藤も伝えられ一所懸命戦国武士のロマンが彷彿される。

また、このような土地故、埋蔵された歴史の跡が予想はされていたが、今回県営圃場整備事業として農地の改良が行われるに至り、去る昭和61年遺跡の試掘調査が県教育委員会の協力により行われ多数の埋蔵文化財が発掘された。それは中世のものでなく、遠く弥生時代の遺跡であり、今さらながら地域の歴史の古さに驚いたものである。

平成元年改良工事の施行が決まるに先立ち、本格的な発掘調査を実施するに、次第に歴史のベールははがされ、多くの遺物とともに古代人の集落跡、農耕跡の外、遠く瀬戸内との交流の遺跡まで発見されたことは極めて意義あるものと確信する。

本書はその発掘調査をまとめたものであり広く文化財保護の資料として、活用されれば幸いである。

最後に調査にあたり、ご指導頂きました県教育委員会高橋啓明、出原恵三の各先生方並びに地権者、南国耕地事務所、山南土地改良区の方々など調査に御協力頂いた方々に心から御礼申し上げます。

平成5年3月

香我美町教育長 中 村 正 尚

例 言

1. 本書は、香美郡香我美町山南地区県営圃場整備事業に伴う下分遠崎遺跡試掘調査及び本調査報告書の木器編である。前者については、『下分遠崎遺跡試掘調査概報』（昭和62年3月）、後者については『下分遠崎遺跡(1)』（平成元年3月）として刊行しているが、木器及び木製品については、試掘調査出土分の一部についてしか触れることができなかった。本書はそれを補うものである。
2. 遺跡は、高知県香美郡香我美町下分遠崎に所在する。
3. 調査は、昭和63年10月3日～11月28日に実施した。
4. 調査対象面積は15,000㎡であり、発掘調査は410㎡（国庫補助対象発掘調査面積82㎡、緊急発掘調査面積328㎡）である。
5. 調査は、香我美町教育委員会の依頼により高知県教育委員会が行った。
調査顧問 岡本健児 （高知県文化財保護審議会会長）
調査員 高橋啓明 （高知県教育委員会 文化振興課社会教育主事）
出原恵三 （ “ ” 文化振興課主事）
事務担当 清藤正郎 （香我美町教育委員会 社会教育係長）
6. 本書の執筆・編集は、出原恵三が行った。
7. 木器の保存処理は、奈良大学文学部助教授西山要一先生にお願いした。記して深く謝意を表する。
8. 遺物は香我美町教育委員会で保管している。

本文目次

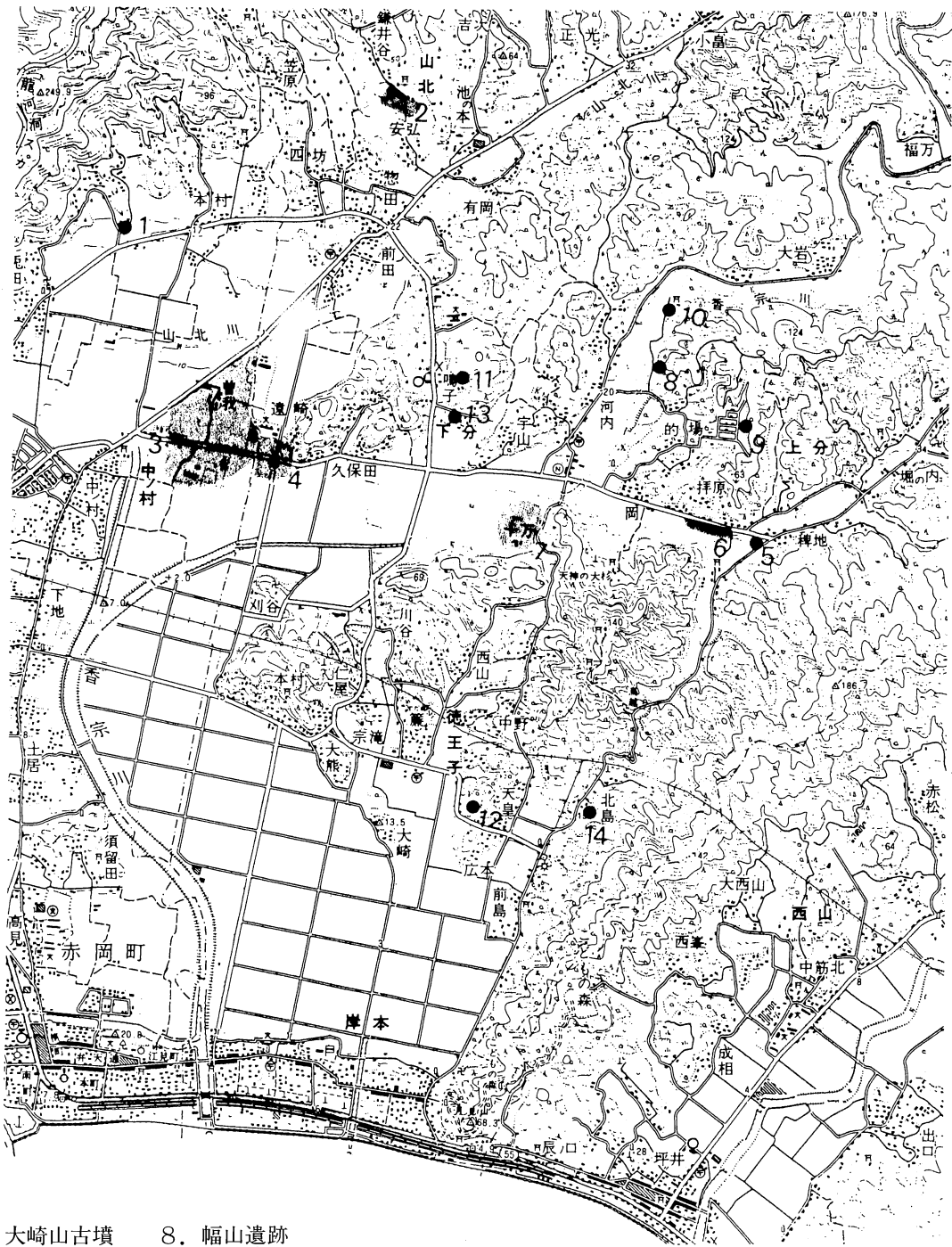
1. 木器及び木製品観察表	3～5
2. 考察	
(1) 木器及び木製品	16～17
(2) 集落の消長と森林破壊	18

図版目次

Fig 1	周辺の遺跡	1
Fig 2	調査区位置図	2
Fig 3	木器実測図 1 鋤	6
Fig 4	" 2 広鋤・板状木製品	7
Fig 5	" 3 栓状木製品・棒状木製品	8
Fig 6	" 4 ヘラ状木製品、ヘアースピン、弓、椀、浮子状木製品、板状木製品、棒状木製品	9
Fig 7	" 5 板状木製品	10
Fig 8	" 6 板状木製品・柱状木製品	11
Fig 9	" 7 板状木製品	12
Fig10	" 8 板状木製品	13
Fig11	" 9 板状木製品・柱・柱状木製品	14
Fig12	" 10 板状木製品	15

写真図版目次

P L 1	鋤
P L 2	同裏面
P L 3	鋤・鋤
P L 4	同裏面
P L 5	浮子状木製品
P L 6	鋤・椀・柱状木製品
P L 7	棒状木製品・弓・栓状木製品・ヘラ状木製品・ヘアースピン・板状木製品
P L 8	板状木製品
P L 9	棒状木製品
P L 10	板状木製品
P L 11	板状木製品、柱状木製品



- 1. 大崎山古墳
- 2. 安弘遺跡
- 3. 曾我遺跡
- 4. 下分遠崎遺跡
- 5. 稗地遺跡
- 6. 拝原遺跡
- 7. 十万遺跡
- 8. 幅山遺跡
- 9. 的場遺跡
- 10. 幅山古墳
- 11. 鳴子古墳
- 12. 花散里古墳
- 13. 鳴子遺跡
- 14. 徳王子古窯祉群

1 : 25,000

500m 0 500 1000 1500

Fig 1. 下分遠崎遺跡の位置

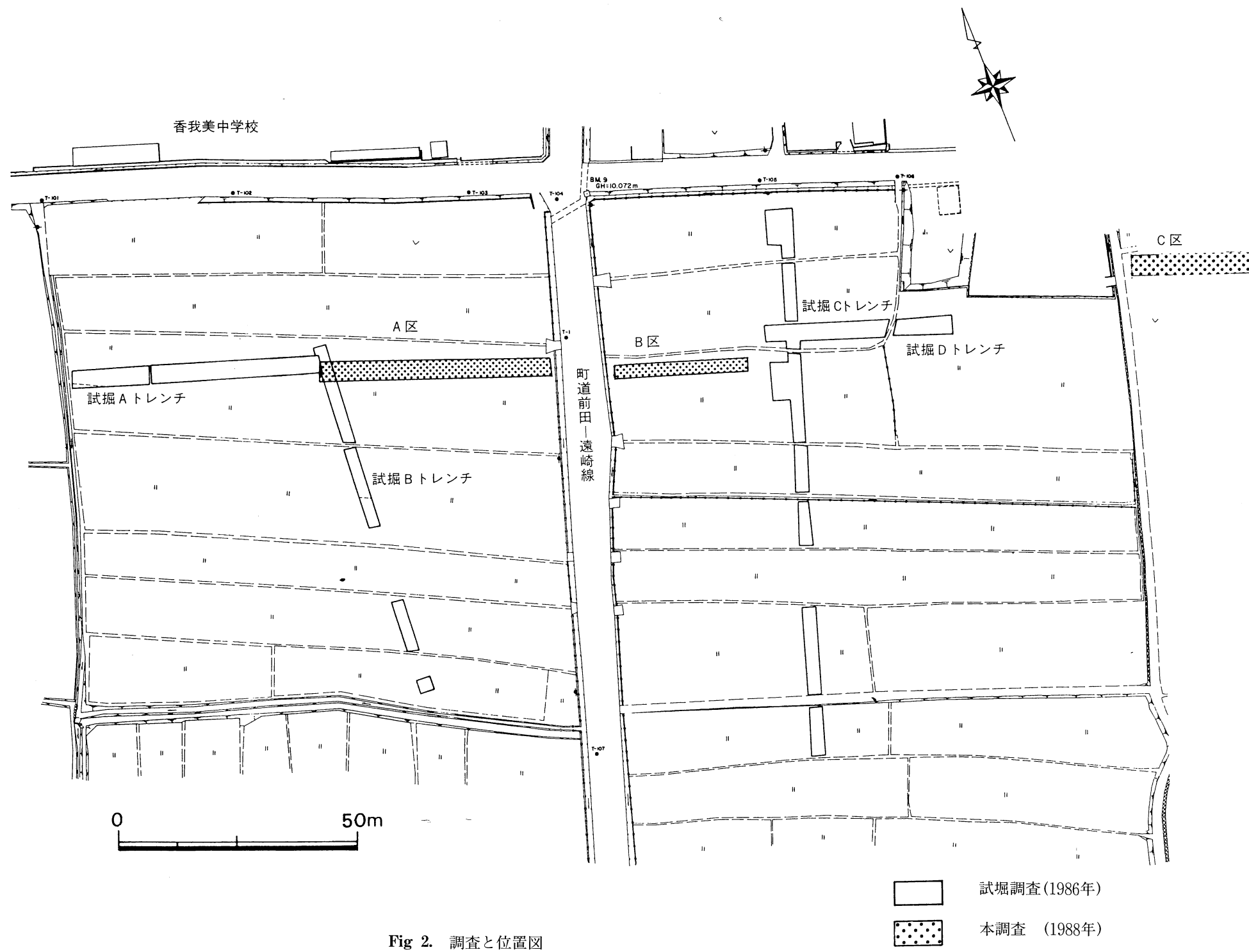


Fig 2. 調査と位置図

1 木器及び木製品観察表 1

遺物NO	器種	出土地点 遺構	時期	長さ・幅・厚さ (cm) 残存 ()	特徴
1	鋤	SD5	中期中	(12.3)・(6.1)・1.4	鋤先の肩部の細片である。肩部のコーナ部と側縁の一部のみが、原形をとどめている。柄部の位置からして幅のせまい鋤と考えられる。長軸側の欠損部は、激しく焼け焦げている。
2	"	"	"	(9.4)・(5.9)・1.1	鋤先の先端部の細片である。一方の側縁部と刃部の一部が原形をとどめている。刃部は鋭角につくり出されている。
3	"	Aトレンチ VII層	中期前葉	27.2・(5.0)・1.2	方形の着柄隆起部をもつ。隆起部の厚さは1.4cm 断面台形を呈す。長側縁は斜めの面取りがなされ、主面は内湾気味。裏面には使用による磨耗が見られる。
4	"	SD4	"	32.0・(5.9)・1.2	平面形態から二又鋤と考えられるが、3.0×3.5cm の円孔が不可解。刃部の断面はカマボコ状を呈す。
5	板状木製品	Aトレンチ	不明	15.0・5.3・0.8	
6	"	" VI層	中期	10.0・5.0・1.2	
7	鋏	Aトレンチ VII層	中期前葉	(22.0)・18.3・1.9	刃部先端と基部を焼失。一辺2.8cm前後の方形の着柄孔あり。裏面は全面激しく焼けている。
8	棒状木製品	SD5	中期中	53.3・2.7・1.5	断面方形を呈し、表面に加工痕跡が認められる。
9	栓状木製品	試掘調査 Cトレンチ VIII層	中期前葉	(10.0)・2.0・2.3	自然木をそのまま利用している。栓部は径0.8cm 前後に削り出し、頭部は丁寧に仕上げている。
10	"	試掘調査 SD1	不明	(11.6)・2.4・2.0	全体に丁寧に削り出し。栓部の径は1.4×1.2cm。
11	棒状木製品	SD5	中期中	(12.0)・2.5・1.8	
12	"	"	"	(21.2)・3.0・2.5	鋤または鋏の柄の可能性はある。
13	"	試掘調査 Cトレンチ VIII層	中期前葉	(38.5)・2.6・1.9	表面が全体的に磨耗している。
14	"	SD5	中期中	(36.0)・2.4・1.4	断面隅丸方形
15	"	"	"	(25.4)・2.2・1.3	断面楕円形。一方の端部が欠損。

木器及び木製品観察表 2

遺物NO	器種	出土地点 遺構	時期	長さ・幅・厚さ (cm) 残存 ()	特徴
16	棒状木製品	試掘調査 Cトレンチ VIII層	中期前葉	(18.5)・2.7・2.0	断面楕円形。一方の端部が欠損。
17	ヘラ状 木製品	Aトレンチ V層	"	11.9・1.1・0.3	斜めにつくり出された端に使用痕が認められる。
18	ヘアーピン	SD5	中期初	15.2・0.6・0.3	基部から先端に向かって次第に細く作られている。先端から12cmの範囲が黒色に変化している。顔料を塗布している可能性がある。
19	棒状木製品	Aトレンチ	中期前葉	10.5・1.3・1.2	部分的に面取りしている。
20	弓	SD4 床面	中期	(13.5)・2.2・1.3	丸木弓の基部であろうか。一側面が凹状をなし、5箇所には桜皮をまいている。
21	椀	Aトレンチ V層	中期前葉	(7.1)・(7.9)・0.4	底部付近のみ形状をとどめている。きわめて薄く仕上げられている。内底をのぞいて前面焼けている。
22	板状木製品	試掘調査 SD6 床面	前期末	(17.3)・8.0・1.0	
23	浮子状 木製品	SD3b	中期前葉	22.2・6.4・1.1	短軸断面は、偏平なカマボコ状を呈す。中央部に2孔、両端部に1孔ずつの小孔(径5mm)を穿つ。
24	板状木製品	試掘調査 SD4 床面	前期末	(8.9)・8.2・0.8	
25	"	試掘調査 SD3	中期	(27.4)・(5.4)・2.0	
26	"	SK1	中期初	(24.9)・(13.1)・3.1	中央部に径4cmの円孔が穿たれている。建築材であろうか。
27	"	SD5	"	(21.0)・(17.0)・1.3	一方の主面は、加工痕がみられる。
28	"	試掘調査 Bトレンチ SD1	中期前葉	(23.5)・9.0・2.3	一方の短辺は、焼失している。
29	"	SD5	中期初	(12.6)・7.8・2.9	一方の主面に加工痕がみられる。
30	"	"	"	(26.0)・(9.5)・0.8	

木器及び木製品観察表 3

遺物NO	器種	出土地点 遺構	時期	長さ・幅・厚さ (cm) 残存 ()	特徴
31	柱状木製品	Aトレンチ VIII層	前期末	16.7・径5.4~6.0	小口は両面共に切られている。
32	"	SD5	中期初	12.5・径7.0~8.3	両小口は、明らかに鉄器で複数方向から斜めに切られている。
33	"	試掘調査 Bトレンチ SD1	中期前葉	20.8・径5.7~6.7	"
34	板状木製品	試掘調査 Cトレンチ VIII層	前期末	(54.0)・12.2・2.2	一方の長側縁は、V字状に抉られ、一方の短辺部はUに抉られている。共に加工痕が認められる。
35	"	Aトレンチ VII層	中期前葉	(32.0)・9.3・1.3	短辺近くに2.0×1.5cmの孔が穿たれている。
36	"	試掘調査 Cトレンチ VIII層	前期末	32.8・10.0・2.8	一方の短辺が長く、他方の短辺が短い。前者は鉄器を用いて垂直に切られ、後者は斜めに切られている。矢板状のものを想定できる。
37	"	試掘調査 Aトレンチ	中期前葉	(25.1)・13.5・4.3	激しく焼けている。
38	"	SD5	中期初	(25.9)・10.1・2.3	"
39	"	試掘調査 Cトレンチ VIII層	前期末	48.0・8.0・1.0	
40	柱	P40	"	(40)・径13.5~16	
41	柱状木製品	SD5	中期初	7.4・7.7・5.0	両小口共に鉄器で加工している。
42	板状木製品	試掘調査 Cトレンチ X層	前期末	83.5・9.2・1.0~3.0	断面がV字状をなす板材で、幅のせまい長側縁側が長さ20cm、幅4cmにわたって抉り取られている。
43	"	"	"	(26.6)・9.0・1.2~2.2	断面がV字状をなす。

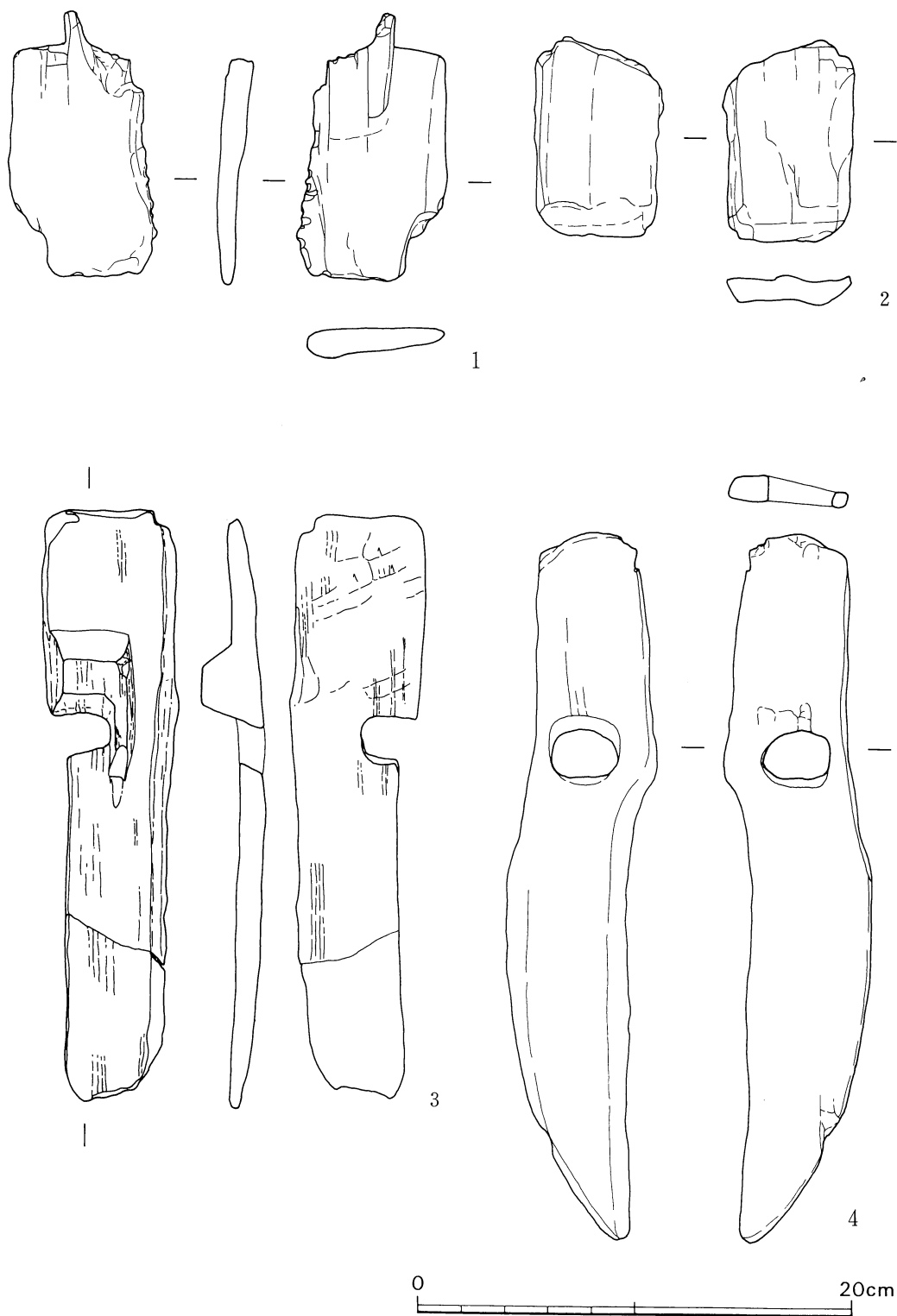


Fig 3. 木器実測図 1
鋤(1~4)

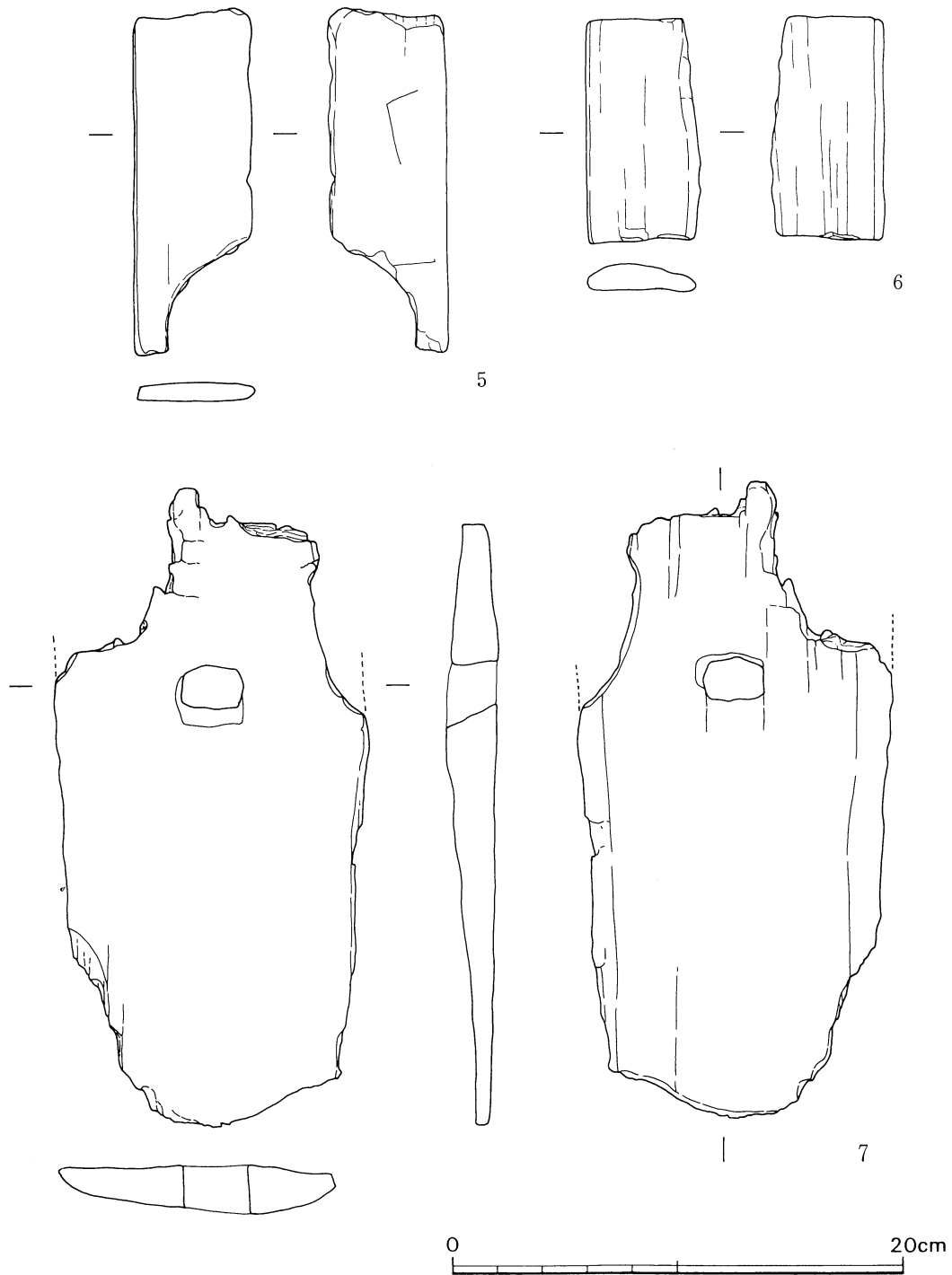


Fig 4. 木器実測図 2
板状木製品 (5・6)
広鋏 (7)

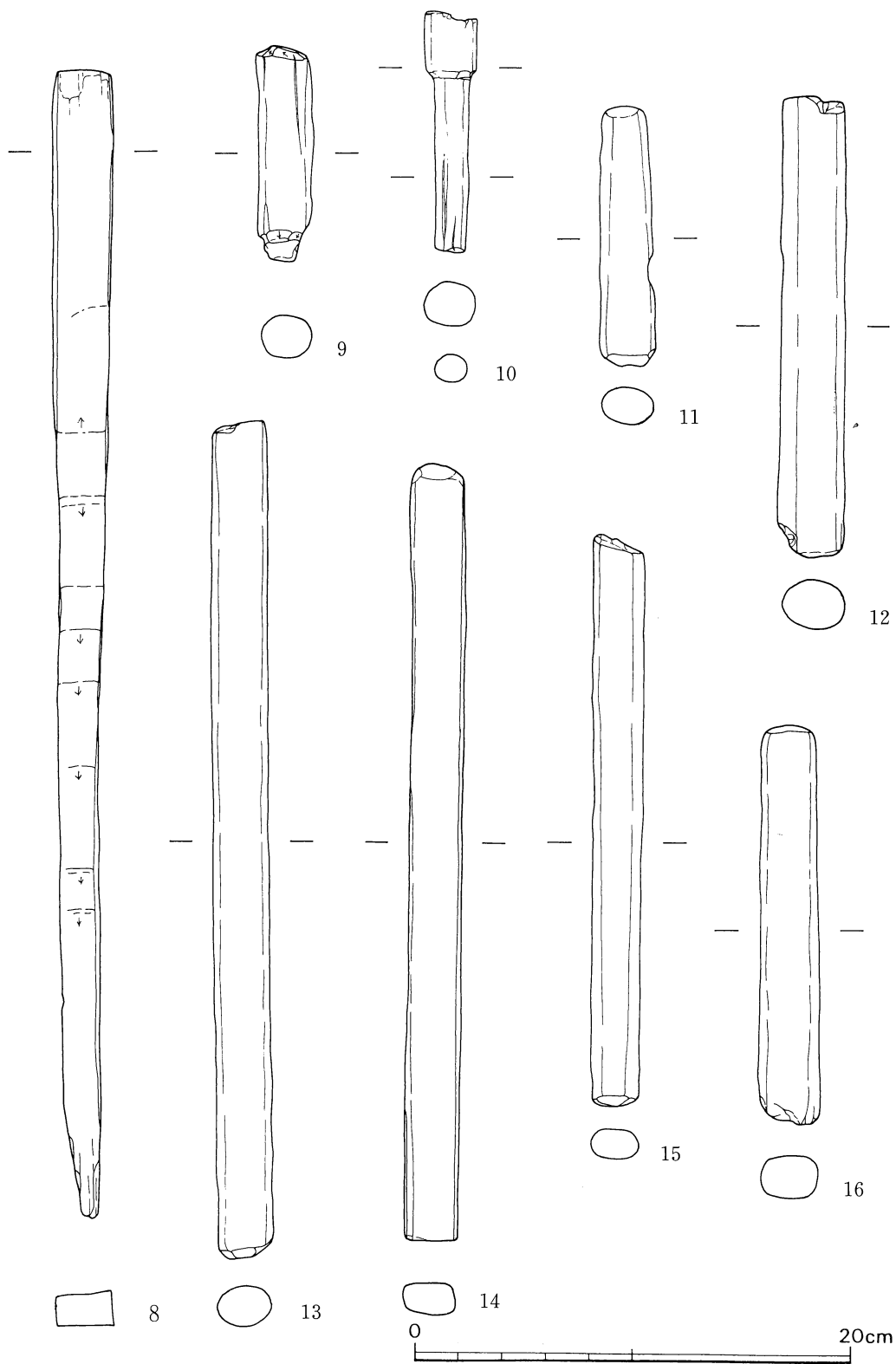


Fig 5. 木器実測図 3

栓状木製品 (9・10)

棒状木製品 (8・11~16)

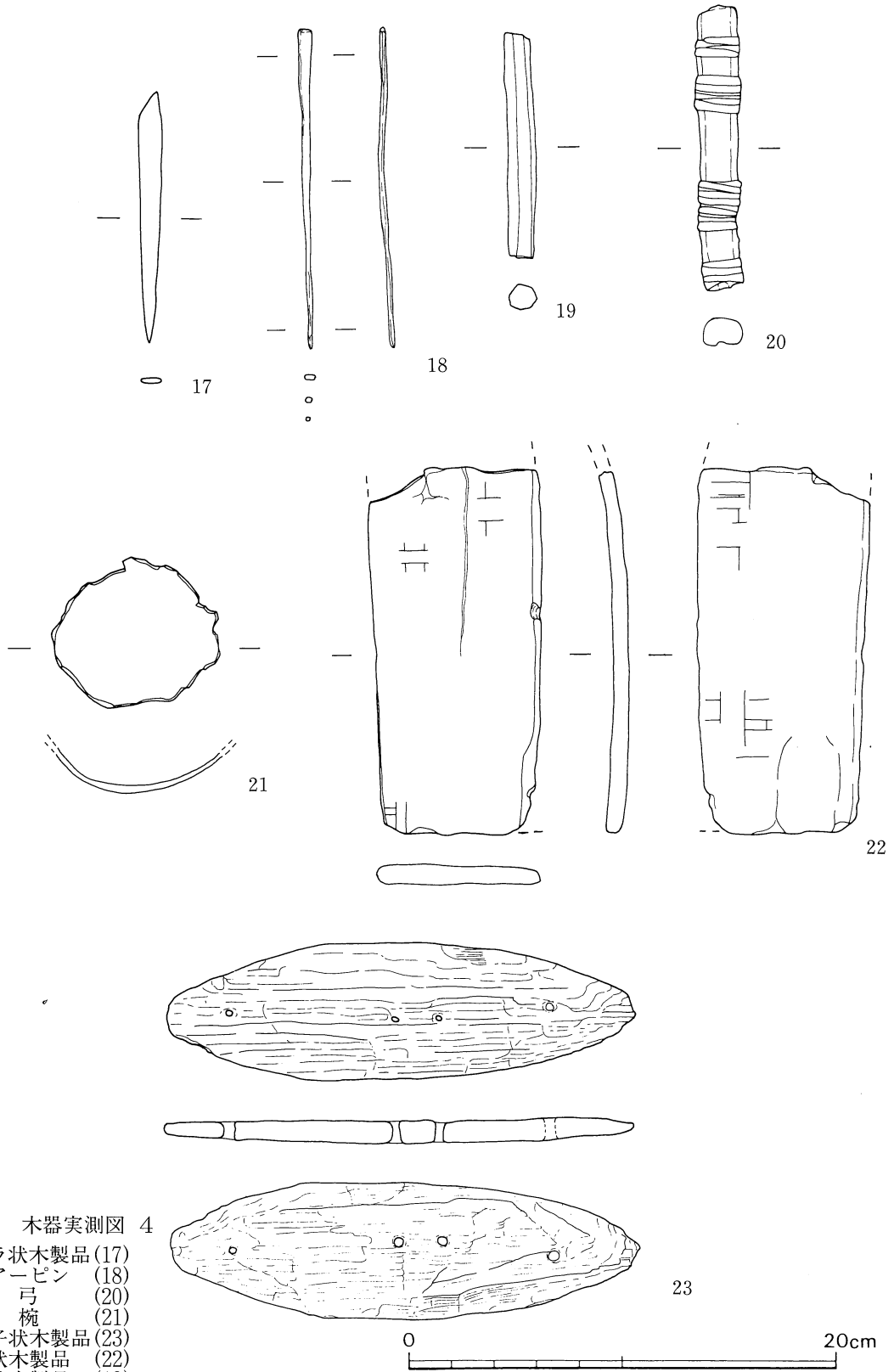


Fig 6. 木器実測図 4

- へら状木製品 (17)
- ヘアーピン (18)
- 弓 (20)
- 碗 (21)
- 浮子状木製品 (23)
- 板状木製品 (22)
- 棒状木製品 (19)

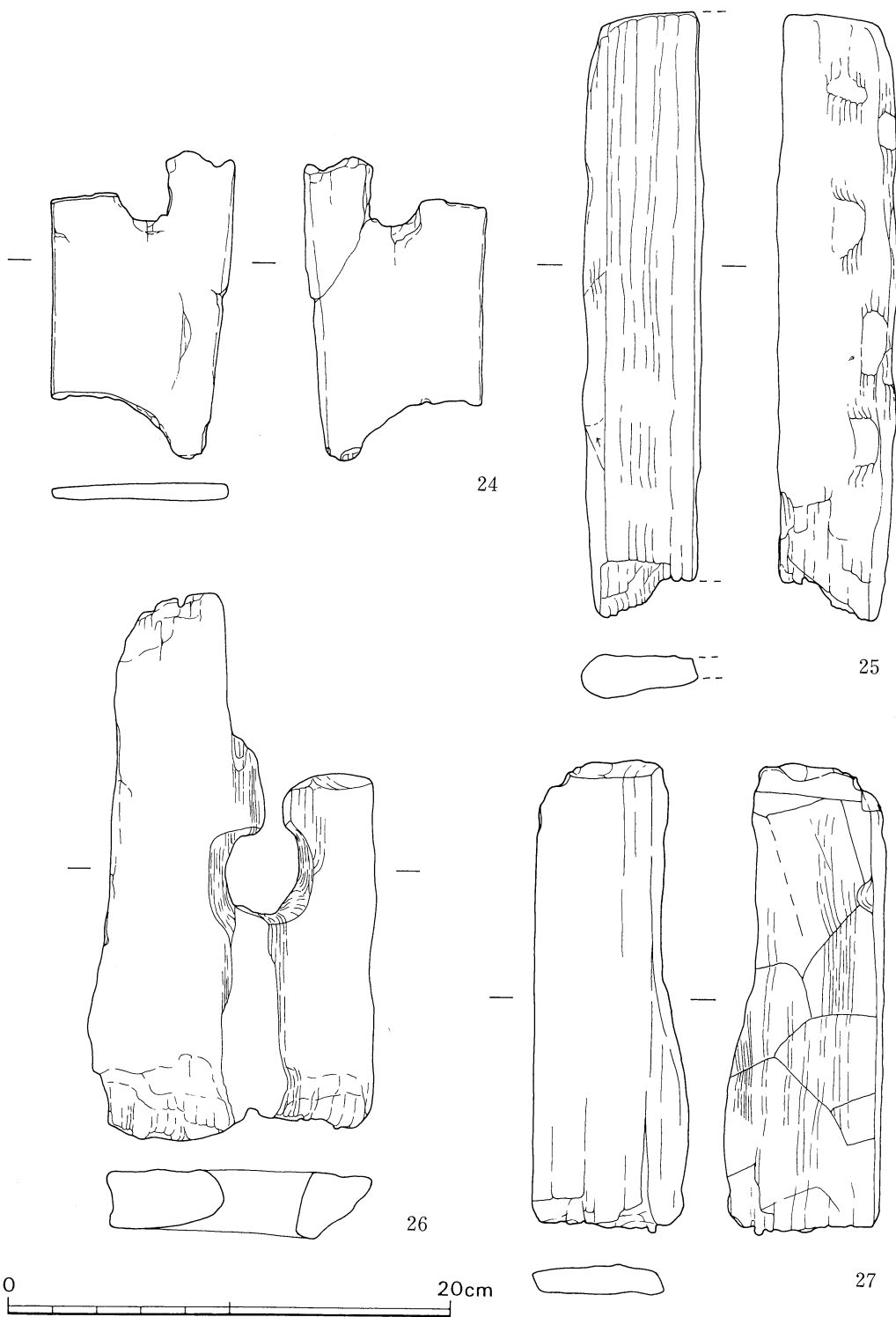


Fig 7. 木器実測図 5 板状木製品

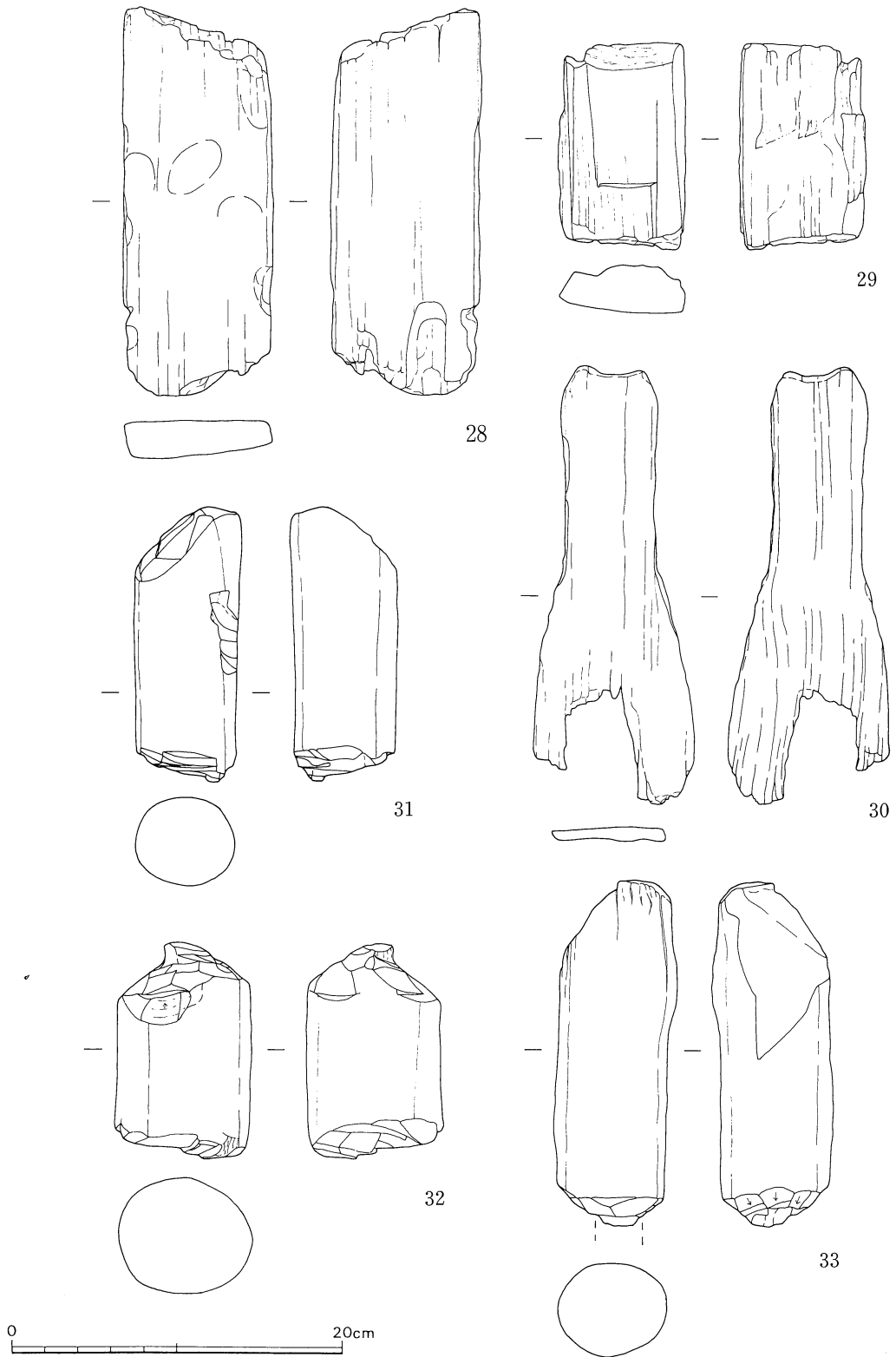


Fig 8. 木器実測図 6

板状木製品 (28~30)
柱状木製品 (31~33)

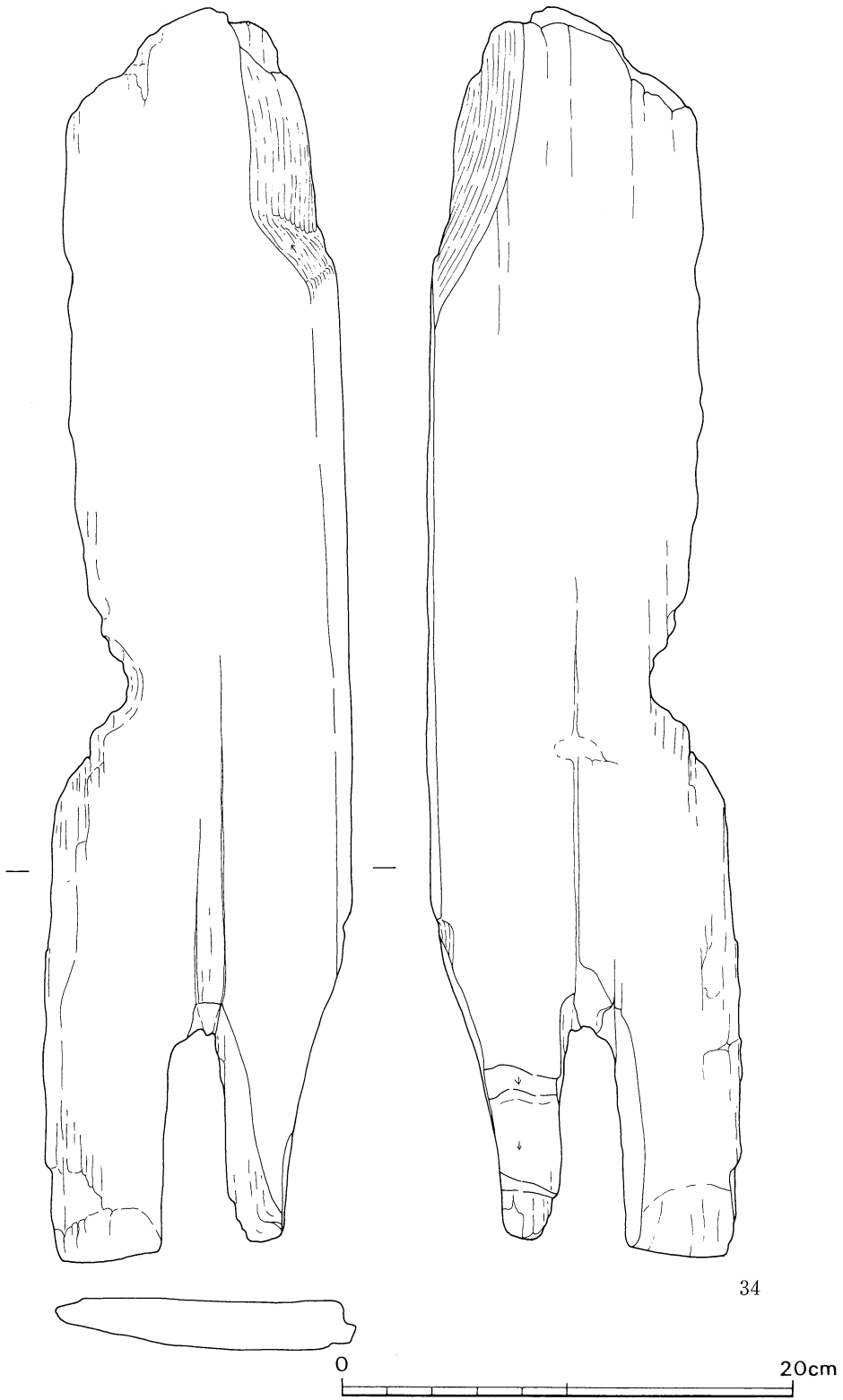


Fig 9. 木器実測図 7
板状木製品

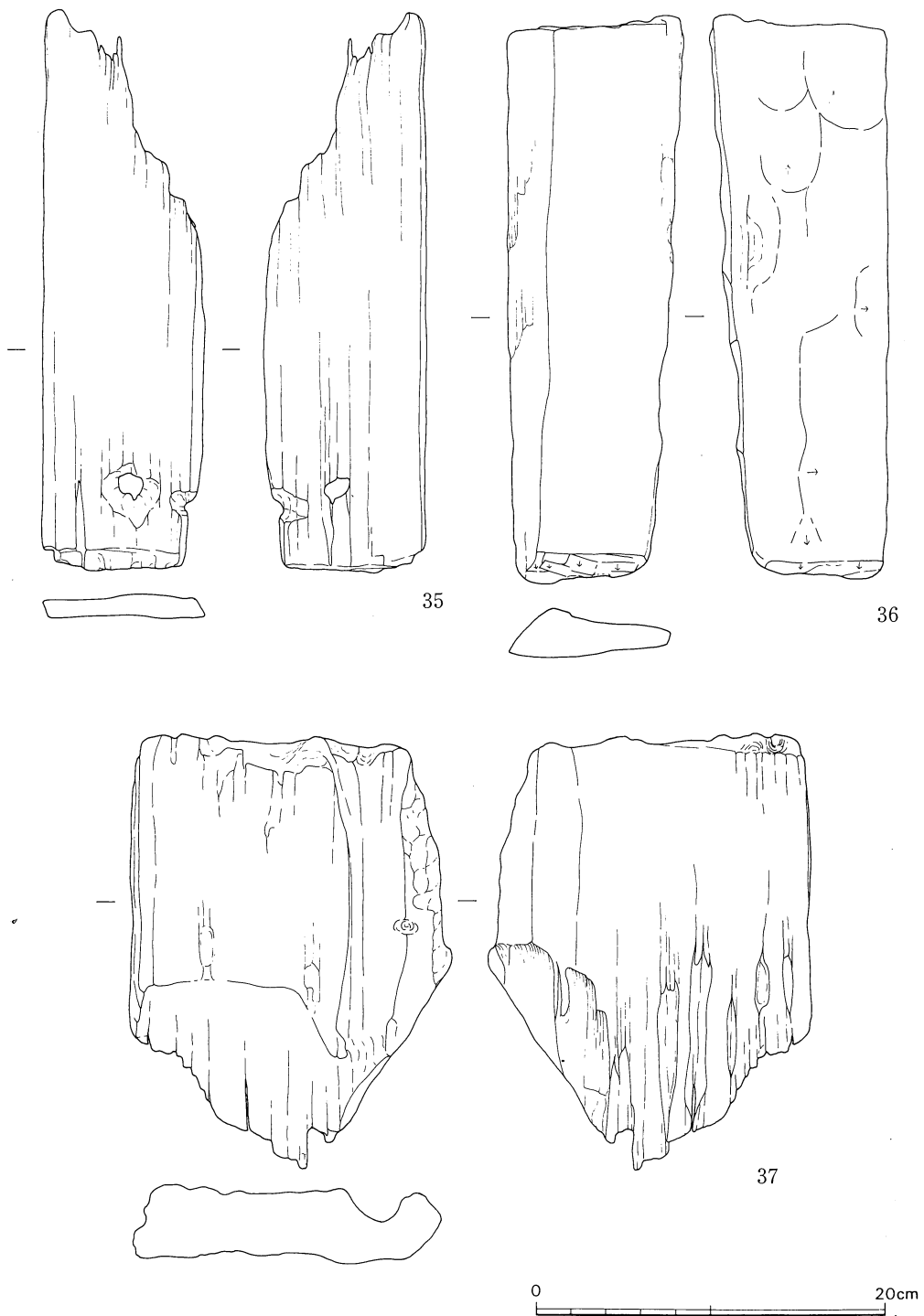


Fig 10. 木器実測図 8
板状木製品

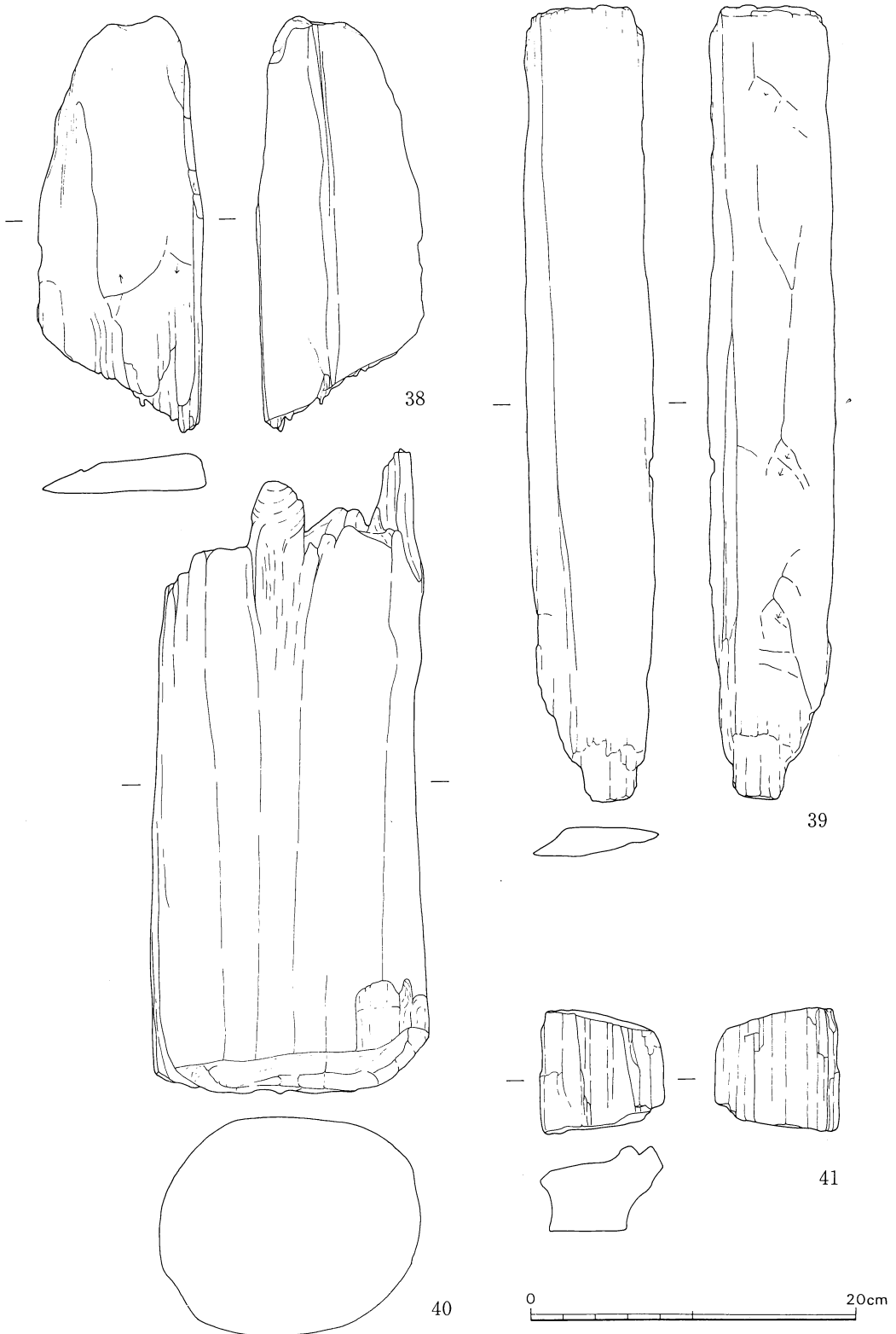


Fig 11. 木器実測図 9

板状木製品 (38・39)

柱 (40)

柱状木製品 (41)

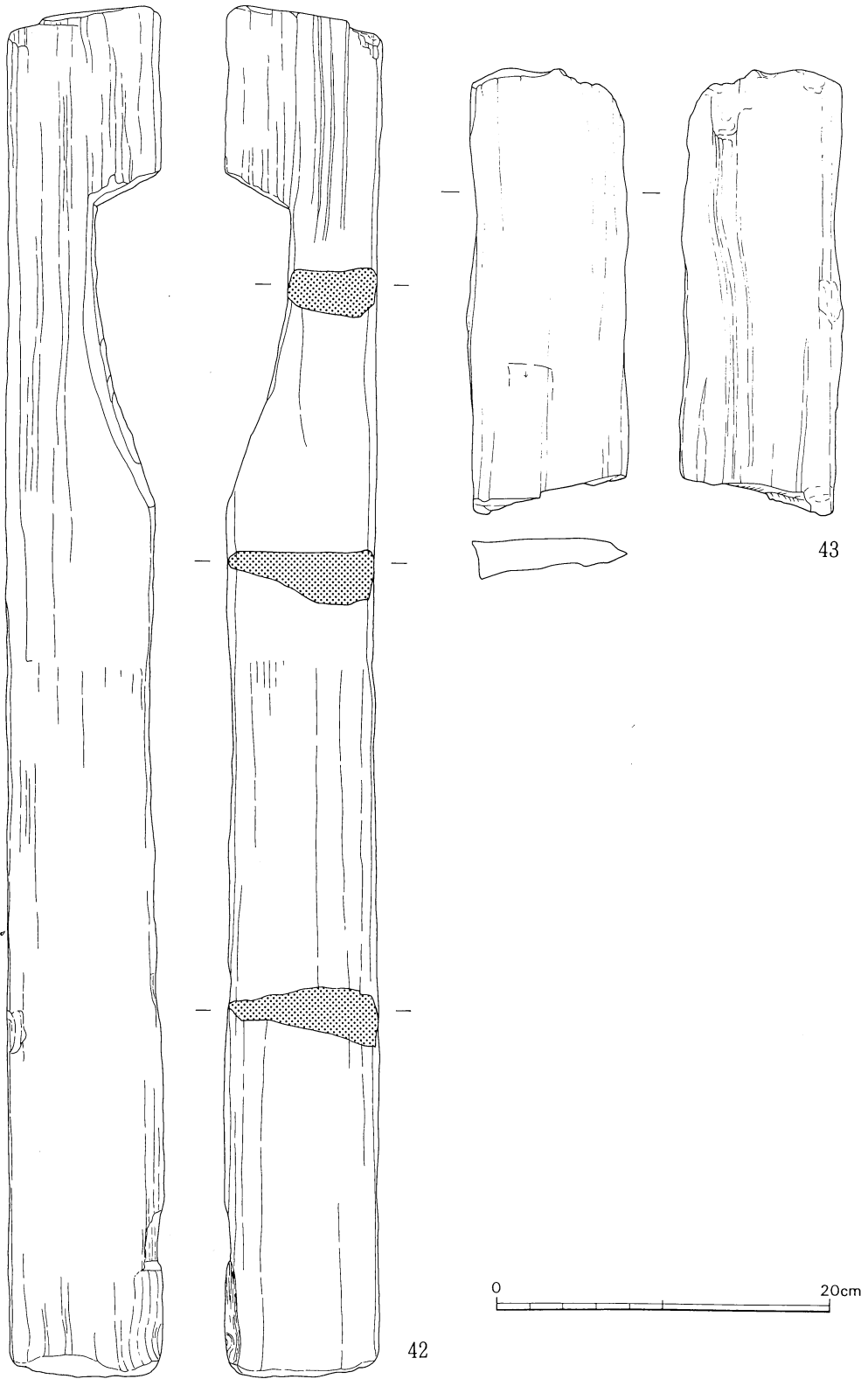


Fig 12. 木器実測図 10
板状木製品

2. 考察

(1)木器及び木製品

試掘調査及び本調査で出土した木器及び木製品の総点数は100点以上にのぼるが、器種や用途の判明しているものは比較的少ない。しかも全体の形状が把握できるものは極めて僅少である。用途の明らかなものとしては、農耕具、工具、狩猟具、装身具、祭祀用具などを挙げることができる。

農耕具は鋤と鋤があるが、前者は試掘調査で出土した1点と本調査の1点（Fig 4 - 7）のみで他はすべて鋤である。前者は、舟形の着柄隆起が外側につき着柄角度65度を測り平鋤と考えられる。後者は、明確な着柄突起を有さず内側がわずかに厚味を帯びている程度である。着柄孔は一辺2.8cm前後の隅丸方形をなし、着柄角度は明瞭ではないが60度前後と考えられる。Fig 4 - 7は着柄孔の位置から「広ぐわB」としなくてはならない。また鋤ないしはエブリと考えられる余地もある。鋤は試掘調査で4例、本調査で4例の計8点⁽¹⁾が出土している。このうち全体の形状が把握できるものは、試掘調査の2例と本調査の1例（Fig 3 - 3）⁽²⁾である。前者の1例は着柄鋤であり、他の1つは「一木すき」B⁽³⁾である。Fig 3 - 3は、台形状の着柄突起を有し推定2×3cmの柄挿入孔が横長に穿たれており、着柄角度は120度を測る。本例は一般に「踏すき」、「踏みぐわ」と称されているものに属す。ただ鋤として使用した時、最も磨耗痕が顕著に現れると考えられる刃部裏面に顕著な磨耗が認められない。Fig 3 - 4は、「ナスビ形着柄スキ」となる可能性があるが、孔の位置が不可解である。本例も刃部先端裏面の一部に磨耗痕が認められるのみである。またこれら鋤・鋤の柄部については、後述する棒状木製品の一部分を一応該当させることができよう。

工具は試掘調査で伐採斧の石斧台が1点出土しているのみである。狩猟具の弓は、試掘調査で1例と本調査で1例（Fig 6 - 20）⁽⁴⁾が出土している。共に丸木弓の基部で桜皮をまいている。装身具としてはヘアースピ（Fig 6 - 18）が、祭祀具としては、試掘調査時に陽莖が1点出土している。柱根と考えられるものは十数点出土しているが腐食の進んでいるものが多い。その中で本調査A区のP40から出土した柱根（Fig 11 - 40）は残りが良い。径14~16cmを測るヒノキ材で、樹皮を剥いだうえに幅5cm前後の刃器で面を取るようにはついている。しかもこの基礎には前期の大型壺部が転用されていた。柱には根ばさみのあるものや割材を利用した例もある。

以上の他に明確な製品と判るものとしては、ヘラ状木製品（Fig 6 - 7）、柱状木製品

用途	器種	試掘調査出土点数	本調査出土点数	計
農耕具	鋤	1	1	2
	鋤	4	4	8
工具	石斧台	1		1
狩猟具	弓	1	1	2
漁撈具			1	1
調理具	杵	2		2
食器	椀	1	1	2
装飾具	ヘアースピ		1	1
祭祀具	陽莖	1		1
その他	ヘラ		1	1
	浮子状木製品		1	1

(Fig 5-9、10)、浮子状木製品 (Fig 6-41)⁽⁶⁾ などがある。

次に用途・性格が明瞭でない棒状、板状木製品について述べたい。棒状木製品は、Fig 5-8、11-16である。8は断面が方形で長軸方向に走る加工痕を明瞭にとどめているのに対して、他のものは断面楕円形ないしは隅丸方形を有し、表面は全体が磨耗しているものが多い。11~16については、鋤・鍬の着柄孔の大きさともほぼ合致するところからこれらの柄部と考えられる。しかし全体的にやや貧弱な観があるのは否めない。板状木製品は、大きさ厚さ共にバリエーションが多い。Fig 7-26は径4cm前後の隅丸方形の穴が穿たれている。もろ手鍬の可能性も否定できないが、刃部が全く不明であるところからここでは建築材としておく。Fig 7-25、Fig 8-28、Fig 9-34、Fig 10-36、Fig 11-38・39、Fig 12-42・43は、木口が二等辺三角形状を呈するもので「ミカン割り」技法によっている。これらの長さは欠損等もあって不揃いであるが、幅は8~10cm、厚さも2~3cmの中におさまる。明らかに一定の規格性をもっていることが窺える。このままでも矢板としては使用できるが、木器製作過程のⅡ段階⁽⁷⁾を示すものと言えよう。36は先端に細かな加工痕が認められ、42は何らかの製品を舟底状に取られている。

以上極めて粗略であるが、木器及び木製品について述べてきた。これらの木器及び木製品は出土状況から見て弥生前期末~中期前半(第Ⅲ様式段階併行期)に属するものである。器種・用途の明瞭なものが少なく、かつ欠損品が多いことから当該期の木器組成を十分に明らかにすることはできなかった。しかしながら本県においては弥生時代の木器が出土する遺跡は、下分遠崎遺跡と西部の西ノ谷遺跡⁽⁸⁾のみであり、しかも後者は前期末の広鍬1点のみであることから、当遺跡の諸遺物は、現段階における高知平野の木器組成を知る唯一の資料ということになる。

ここで木器のうちで最も多かった農耕具について若干の考察を行いまとめたい。試掘調査、本調査合わせて鍬が2点、鋤が8点出土しており、当地域弥生時代前期末~中期前半の農耕具組成の一般的傾向を知ることができる。鋤が圧倒的に多いという特徴は、当遺跡及び周辺平野の土壤に起因するところが大いと考えられる。すなわち当遺跡は標高8m前後を測るが香宗川と山北川にはさまれた湿地帯にありグライ化した粘土が深く堆積している。このような土壤で水田稲作を行うためには、排水用水路の掘削が必要であり、耕作においても鍬よりも容易に深く地を掘りかえすことの可能な鋤が多く用いられたのであろう。また鍬が広鍬のみであったのに対して、鋤はナスビ形着柄鋤、スコップ状の着柄鋤、踏鋤、刃先が股状をなす一本鋤などバリエーションが見られるのは作業の内容によって使い分けられていたことが考えられる。このことから鋤優位に農耕及び土木工事等が展開していたと考えてよからう。次に農耕具の材質であるが、試掘調査出土の諸例はすべてアカガシ亜属である。本調査出土例については、樹種鑑定をなし得なかったが、肉眼による限りすべてアカガシ亜属と考えてよい。柄部においても同様である。本遺跡の花粉分析の結果によると前期末・中期前葉の層準からはアカガシ亜属が優勢であるとの結果がでており、これらの農耕具は遺跡周辺の森林から入手し当遺跡⁽⁹⁾

内で一連の加工を行い製品化したことが考えられる。次に加工具について触れなければならない。両調査より出土した磨製石器の組成は、石包丁：伐採斧：加工斧=11：3：7である。⁽¹⁰⁾伐採斧に対して、偏平片刃石斧等の加工斧が2倍以上を占めている。しかしこれまで述べた木器の加工痕跡を観る限りでは、石器による加工痕は全くと言って良い程認められない。すべて鉄器による加工である。従ってこれら加工斧は当該期においてすでに使用に供されることがなかった為に廃棄されたものと考えられることができる。

(2)集落の消長と森林破壊

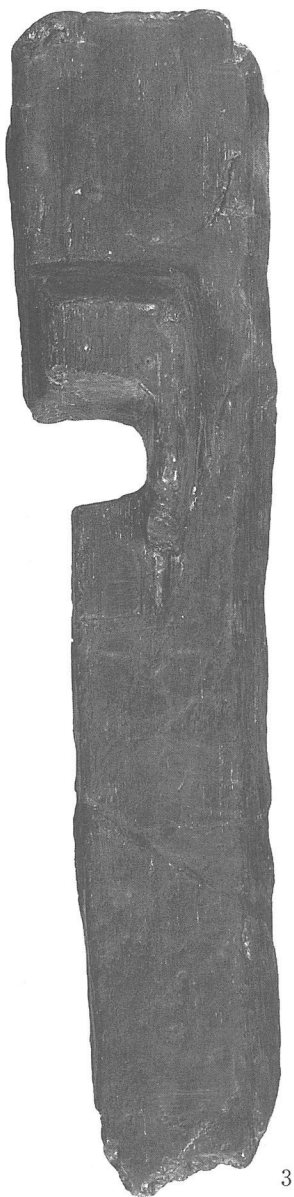
下分遠崎遺跡は前期末から中期前半に営まれた比較的短命な遺跡である。当遺跡が廃絶された以降の層準からは、アカガシ亜属ではなくマツが優勢になっている。このことについて山中三男氏は「それまで優勢であった常緑広葉樹の林が破壊されて、そのあとにマツ林が広がったことを示すものであろう。」⁽⁹⁾としている。主要な生産用具である農耕具や工具の材となる常緑広葉樹を集落近辺の森林に求めた場合、可耕地の拡大と共に原木の必要量が増大し、森林破壊が進行して植生の変化にまで及んだことは当遺跡のみならず全国的に見られる現象である。⁽¹¹⁾ここに集落の廃絶=移動の原因の一つがあるのではなかろうか。すなわち木器の需要の増大による森林破壊と集落の消長の因果関係が窺えるのである。高知平野においても前期末に至ると遺跡数が飛躍的に増加し、それらの諸遺跡は高知平野の中央部よりも周辺部の谷平野や山麓に営まれることが多い。下分遠崎遺跡はその典型とすることができる。そしてこれらの集落に共通して見られることは、そのほとんどが中期後半にまで存続することなく前期末あるいは中期前半のうちに消滅してしまうことである。かかる現象の背景には下分遠崎遺跡及び周辺の森林で生じたと同様な現象が進行していたことが多分に考えられるのではあるまいか。高知平野の中央部に陣取り終始一貫拠点的集落たり得た田村遺跡群は、生産用具については一大消費集落と考えられ周辺の集落からの供給に依存していたことが十分に考えられる。それに対して山麓部の中・小集落は、自らも水田農耕を行いつつ周辺の常緑広葉樹の伐採を行い、周辺に原木が枯渇すると移動するという構図を描くことができる。高知平野においては、中期前半と後半においては集落数、あるいはその立地において大きな断絶が見られる。その原因は政治的な側面に起因するところが大きいと考えられるが、今後資料の増加をまって自然環境の視点からも追求して行かなければならない。

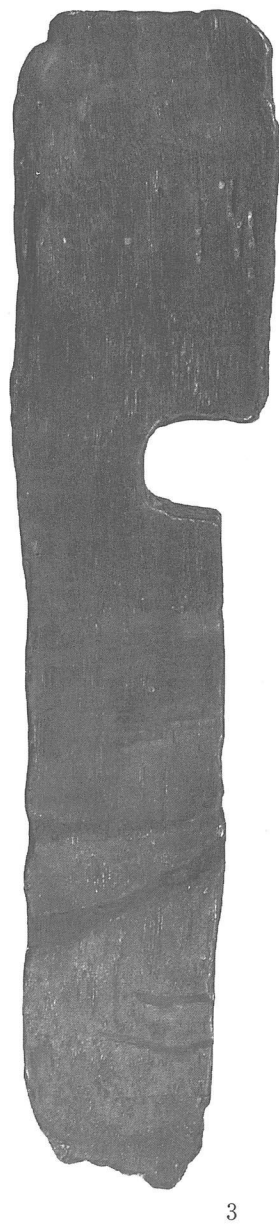
註

- 1) 高橋啓明 出原恵三『下分遠崎遺跡試掘調査概報』 1987年 香我美町教育委員会 Fig27-7
- 2) 黒崎直「農具」『弥生文化の研究』5 1985年 有山閣
- 3) 註(1)に同じ Fig26-1・4

- 4) 註(1)に同じ Fig27-9
- 5) 註(1)に同じ Fig27-11
- 6) 大阪文化財センター 山口誠治氏のご教示による。
- 7) 町田章「木器の製作と役割」『日本考古学を学ぶ』(2) 1980年 有斐閣選書
- 8) 出原恵三「西ノ谷遺跡」
- 9) 山中三男「下分遠崎遺跡の花粉分析(予報)」 前掲註(1)
- 10) 出原恵三「石器」『下分遠崎遺跡』(1) 1989年 香我美町教育委員会
- 11) 町田章「木工技術の展開」『古代史発掘』4 1981年 講談社

圖 版







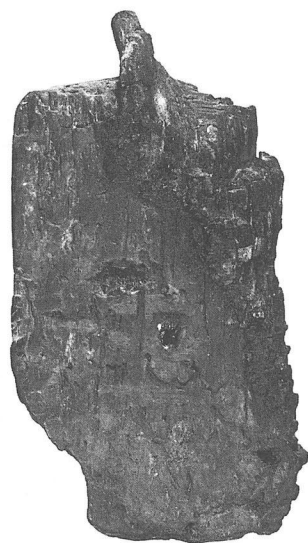
鋤

7



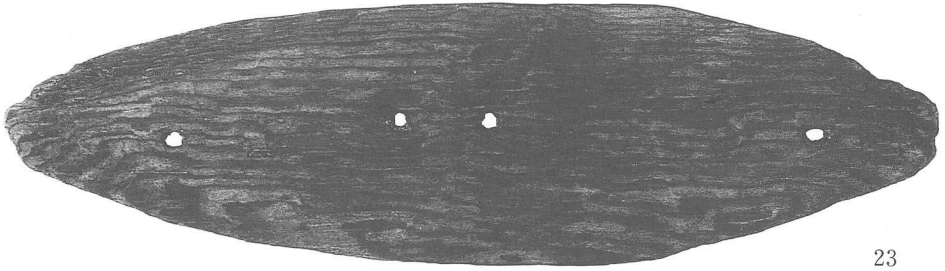
鋤

1



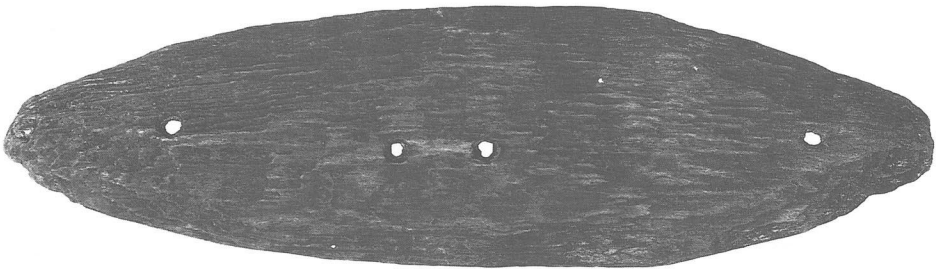
1

7



23

浮子状木製品



同上裏面



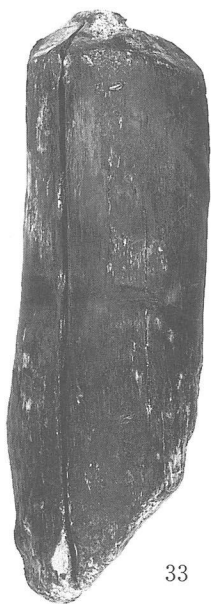
2

鋤



21

椀



33

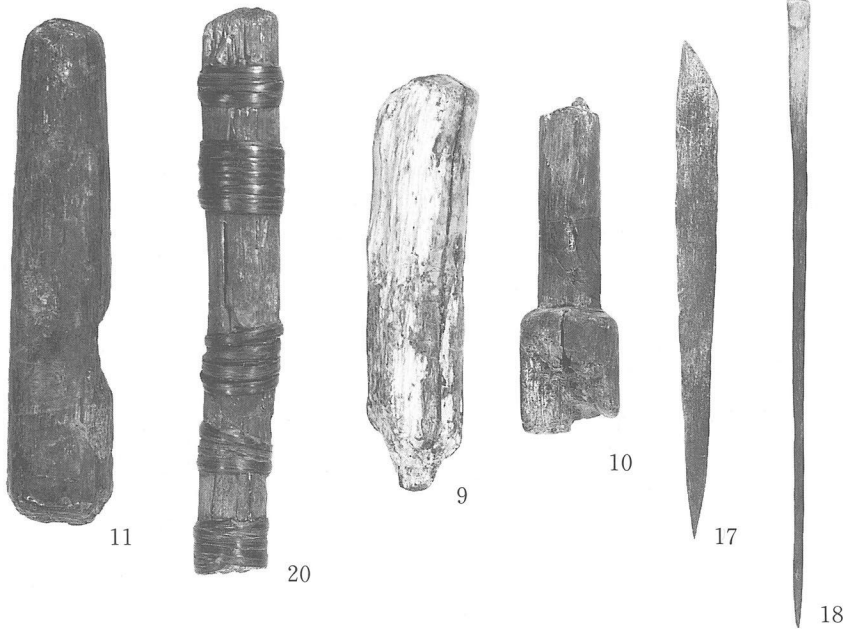


31

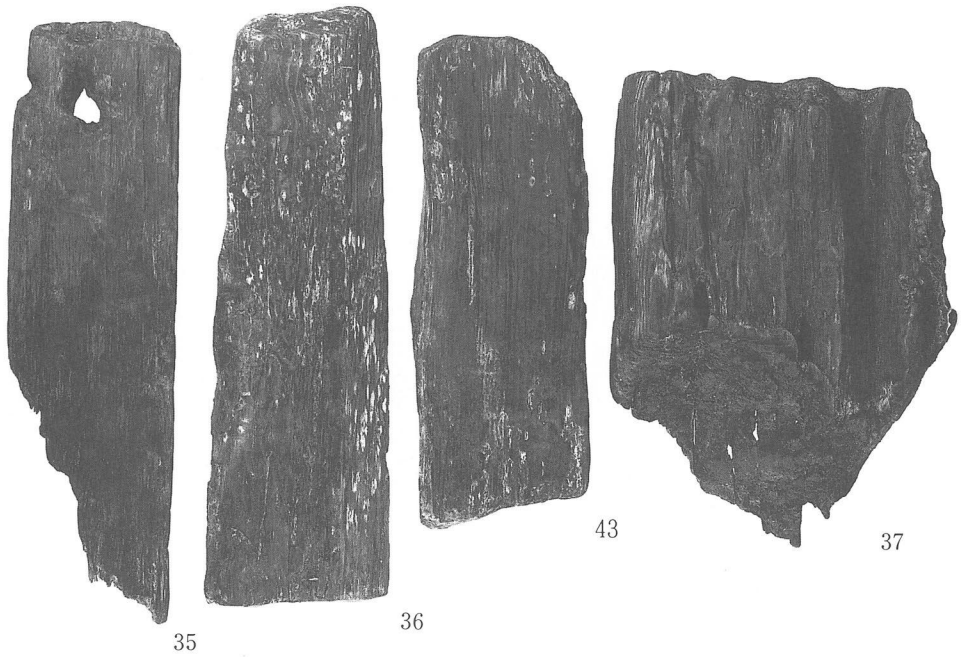


32

柱状木製品



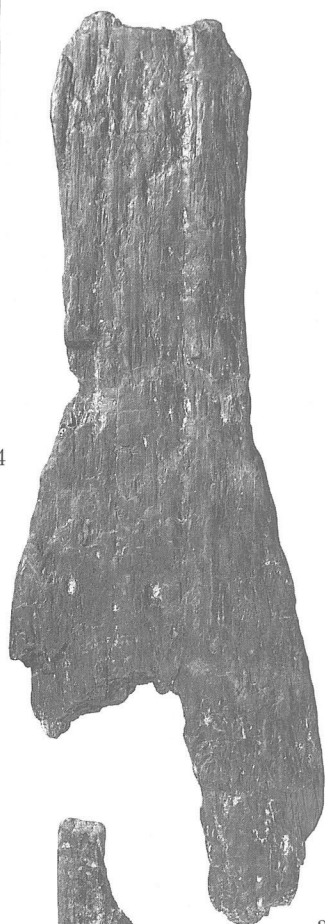
棒状木製品(10), 弓(20), 栓状木製品(9, 10), ヘラ状木製品(17), ヘアーピン(18)



板状木製品



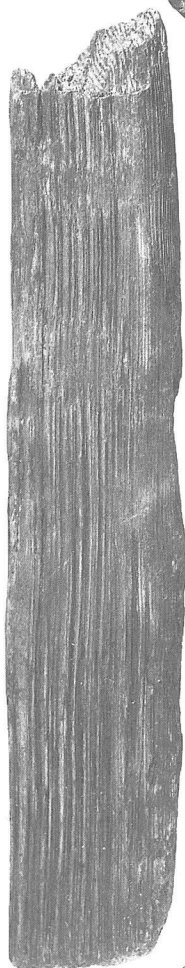
24



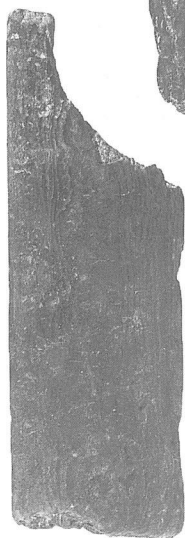
30



22



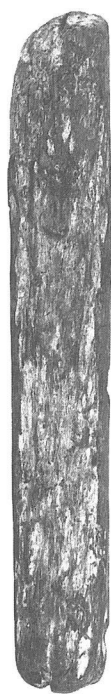
25



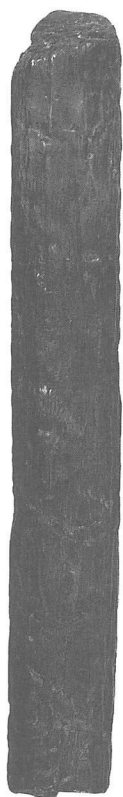
5



28



16



12



15



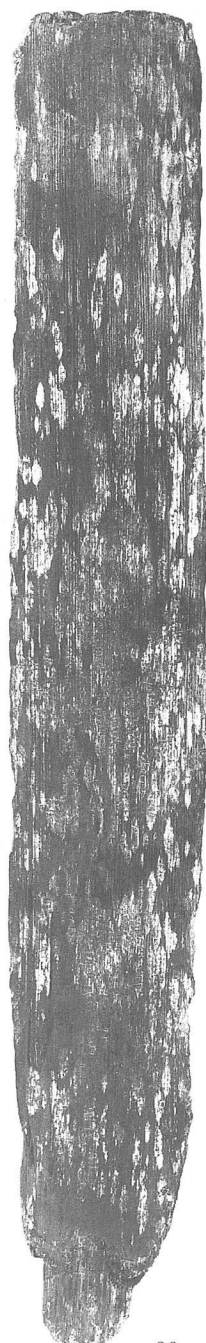
14



13



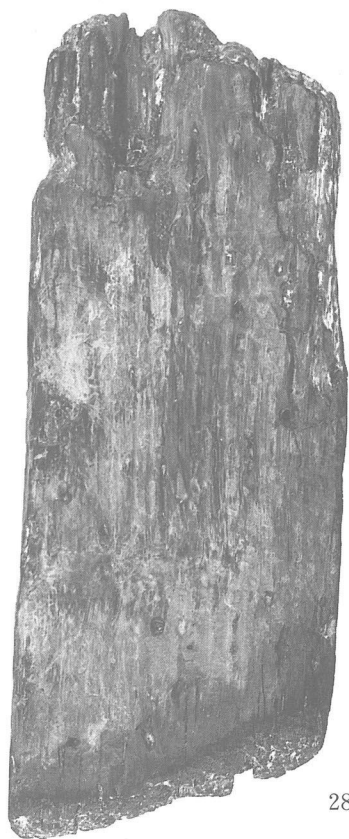
34



39



29



28



26

香我美町埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

高知県香美郡

下分遠崎遺跡（Ⅱ）

1993・3

発行 高知県香我美町教育委員会
（高知県香美郡香我美町徳王子）

TEL 08875-5-2110

印刷 川北印刷株式会社